博士学位論文

内容の要旨及び審査結果の要旨

令和７年５月

長岡造形大学

はしがき

本書は、学位規則（昭和 28 年４月１日文部省令第９号）第８条の規定による公表を目的として、令和７年３月 14 日に本学において博士の学位を授与した以下の者の論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨を収録したものである。

学位の種類	学位記番号	氏　名（ふりがな）	論文題目
博士（造形）	甲第８号	石黒　芙美代（いしぐろ　ふみよ）	ことばに対する絵の特異性 ―制作実践を起点とした民話絵本分析から―

氏　　名	石黒　芙美代
学 位 の 種 類	博士（造形）
学 位 記 番 号	甲第８号
学位授与年月日	令和７年３月 14 日
学位授与の条件	学位規則第４条第１項該当
学位論文題目	ことばに対する絵の特異性 ―制作実践を起点とした民話絵本分析から―
論 文 審 査 委 員	主査　福本　塁　　長岡造形大学准教授
	副査　小松　佳代子　長岡造形大学教授
	副査　天野　誠　　長岡造形大学教授
	副査　山越　康裕　　東京外国語大学教授

論文内容の要旨

本論文は、「ことばに対する絵の特異性とは何か」という問いの答えを、制作実践および民話絵本分析から探究する。制作者としての立場を軸に、教育者としての視点も加味して執筆される。

第 1 部では、制作実践を 2 つ挙げる。1 つめは、《木の葉とこの葉》という落ち葉を描く作品だ。発達心理学の知見をもとに、作品を省察した。それにより、葉という事物名称に対する絵の特異性として、事物の固有性に目をむけやすい性質が見出された。2 つめは、『こんなはなしがあったんだ 少数言語の民話絵本』という絵本の挿絵だ。作画過程の省察からは、民話という文に対する絵の特異性は見出されなかった。しかし、民話および民話絵本の理解不足という課題、民話を民話絵本にすることの可否という議題が浮上した。第 2 部以降、調査、議論を通して、民話という文に対する絵の特異性を検討した。

第 2 部では、本論文における民話および民話絵本ということばの定義を明確にし、両者の特性を調査した。そのうえで、民話絵本の分析方法を策定した。分析方法は、イコノロジー（図像解釈学）を基盤とした。イコノグラフィー（図像学）よりも作画者に注目する分析方法ゆえ、制作者の立場で記される本論文に合致すると考えたからである。そして、分析方法には、ゲシュタルト心理学者のルドルフ・アルンハイムの知見も加えている。本論文が現代の民話絵本を分析対象とするため、知覚心理学の知見が有効だからだ。さらに、物語の構造や筋を確認し、全文を書き写すという工程も加えた。絵と文が一体となっている絵本から、絵と文を分離し、両者の表現を比較するためである。分析対象として、累計発行部数 100 万部を超える民話絵本を選定した。それらは、約 60 年前に出版されて以降、継続的に増刷されるすぐれた民話絵本といえるものだからだ。民話を民話絵本にすることの可否を議論する際、民話が先行しているゆえ、民話絵本は立場が不利である。民話絵本のポジティブな面に焦点を当てるため、それらの民話絵本を分析対象とした。

第 3 部では、第 2 部で選定した民話絵本を分析した。『てぶくろ ウクライナ民話』、『おおきなかぶ ロシアの昔話』、『三びきのやぎのがらがらどん ノルウェーの昔話』、『スーホの白い馬 モンゴル民話』、『おおかみと七ひきのこやぎグリム童話』の 5 冊を各章で順に分析している。

第 4 部では、分析結果を考察した。分析によって、民話絵本における絵の目的が明確になった。それは、「読み手を物語の世界に没入させるとともに、読み手のうちに物語の世界をつくりだすこと」である。この目的を達成するために、各作家は絵本の絵の要素を統一する原理をつくりあげていた。また、各作家が「深い民話理解」や「子どもとの関わり」、「造形的なテクニック」を有していることが確認された。そのうえで、民話という文に対する絵のはたらきとして次の 5 点が見出された。

・民話に出てくるものを絵で示すことで、読み手は民話をより正確に把握できる点
・民話の語り手が減少する中で民話を広く伝えることができる点

・人によって異なるイメージが形成される民話において、他者のイメージをみることができる点
・言語化されていない民話やことばの本質を表すことができる点
・民話の原文の形を残したまま楽しみを余韻として残すというような絶妙なことができる点

民話を民話絵本にすることの可否という議題に対しては、先に挙げた 5 点に加え、次の 2 点から、本論文は、民話絵本を肯定する。

・絵があることで、読者に正確な把握を促すだけでなく、物語の世界に没入させることができる点
・民話の特性を視覚的に表わすことができる点

さらに、民話と民話絵本を異なるメディアと捉えることで、民話の継承活動が口頭性を残す取り組みとして、民話絵本が民話を広く伝える取り組みとしてそれぞれ有効であるという立場を示した。また、民話絵本をよりよくするために、あとがきに、原話や原文、民話が語られる地域の文化を紹介することを提案した。

他にも、民話絵本の分析を通じて副次的な成果を 2 つ得た。「保育領域の造形教育への貢献」および「少数言語の民話絵本制作の展開」である。これらを実践に移すことが今後の課題である。

最後に、本論文の主なる問い「ことばに対する絵の特異性とは何か」に対し、本論文で検討した「絵」と「ことば」は、それぞれ限定的であることを指摘した。それゆえ、「絵」と「ことば」という各メディアのなかにある多様性を整理し、厳密に比較を行うことを今後の課題として挙げた。

審査結果の要旨

本論文「ことばに対する絵の特異性―制作実践を起点とした民話絵本分析から」は、制作実践と理論的枠組みを融合させ、民話絵本における「ことばと絵」の関係を探究する独創的な研究である。民話に絵をつけることの否定的側面への言及が不足している点、言語哲学や認知科学的観点のさらなる掘り下げの必要性、制作過程における「身体性」や「環境性」へのアプローチの深化が求められ、「ことばと絵の特異性」に関する分析は、視覚的象徴性や認知的補助の観点に重点が置かれており、より広範なアプローチを含めた包括的な検討の必要性が課題として指摘された。

しかしながら、本研究は、民話絵本における絵の象徴性や読者の認知過程を体系的に整理し、制作実践を理論的考察と結びつける独自のアプローチを示した点で高く評価された。特に、本論文は、絵本の「記憶性」や「物質性」に着目し、それが読者の身体的体験や物語の理解にどのように作用するかを具体的に分析した点に大きな意義がある。また、作画者ごとの統一原理を明確化し、民話絵本の視覚表現がどのように物語世界と結びついているかを詳細に論じた点も、本研究の独自性を示すものである。さらに、制作実践の記録を通じて、絵本制作のプロセスそのものを研究対象とし、理論と実践の往還を明確に示した点は、今後の制作研究の発展にも寄与するものである。加えて、本研究が保育士養成や文化継承、教育実践への応用可能性を示唆し、少数言語文化の保持・再活性化に対する重要な視点を提供したことも特筆に値する。

口頭試問においては、自身の研究の核心を明確に認識し、今後の展開について具体的な展望を示したことが評価され、制作実践を通じた自己の内面と社会の関心をつなげる視点が本研究の重要な到達点であることが確認された。

総合的に判断し、本論文は博士学位論文としての水準に達しており、その学術的・実践的貢献が認められる。

審査員の審査評を以下に示す。

（主査　福本塁）

本論文は、制作実践研究を基盤とし、イコノロジーとゲシュタルト心理学を理論的枠組みとして適用することで、民話絵本の分析を通じて、ことばに対する絵の特異性を体系的に論じたものである。本研究の独創性は、美術制作と民話絵本の研究を融合させた方法論にあり、既存の美術研究や絵本研究に新たな視点を提供している。特に、制作実践の過程を詳細に記録・分析し、作品の生成過程が理論的考察とどのように結びつくかを明確に示した点は、制作研究としての妥当性を確保する上で重要である。また、民話絵本における絵の役割について、イコノロジーを用いて視覚的要素の象徴性を分析し、ゲシュタルト心理学の視点から読者の認知過程を考察することで、物語世界への没入や読者のイメージ形成の

補助といった絵の機能を明確に整理している。これらの考察は、視覚芸術と物語の関係性を学術的に解明する上で意義深いものである。さらに、本研究は保育領域の造形教育や少数言語の民話絵本制作への応用可能性を示唆しており、文化継承や教育的実践への貢献の可能性を示している。具体的には、物語と視覚表現の関係を体系的に整理することで、絵本制作の実践的な指針を提供するとともに、視覚的な物語理解を促進する教材としての可能性を開くものとなっている。一方で、「ことばと絵の特異性」に関する分析は視覚的象徴性、認知的補助の特定の観点に重点を置いており、認知科学的アプローチや言語哲学的考察、さらには身体性や環境性といった視点については十分に掘り下げられておらず、今後の研究課題として残されている。これについては、本研究の射程を明確にした上で、次なる研究の方向性として提示されている。

以上より、本論文は、分析の視点に不足は見られるものの、美術制作と理論的分析を融合させた独創的な研究であり、学術的・実践的両面からの貢献が認められ、課程博士学位論文の水準に達していると判断する。

（副査　小松佳代子）

本論文は、申請者自身の絵画制作と、これまで少数言語の民話絵本を 2 冊出版した経験を起点に、民話絵本の分析をとおして「ことばに対する絵の特異性とは何か」を問うものである。絵と文からなる読み物でありかつ芸術でもある民話絵本を分析するにあたり、イコノロジー（図像解釈学）とルドルフ・アルンハイムのゲシュタルト心理学を参照する。具体的には日本で長く、広く読まれている優れた 5 冊の民話絵本それぞれについて、作画者の生い立ちや思想、時代状況、絵の要素や構図の効果などを精緻に調査・分析し、それぞれの作画者における絵本を制作するうえでの「統一原理」を見出す。また絵とことばが対応していない箇所から絵本における絵のはたらきを明らかにする。絵に焦点を当てた絵本研究自体がこれまであまりない状況において、本論文の視点自体に大きな意義がある。さらに、本論文は、口承で伝えられてきた民話に絵をつけることの可否や、少数言語の民話絵本の社会的意義といった大きな課題にも一定の結論を得ている。

さらに本論文は、絵本を美術として捉えることで、申請者自身が携わっている保育士養成における選書力の向上、申請者自身の絵本や絵画制作への新たな展開、美術に独自の価値を他領域に示すことなど、さまざまな方向へと展開する可能性を秘めてもいる。

以上のことから、課程博士学位論文の水準に達していると判断する。

（副査　天野誠）

本論文は、絵本における「言葉と絵に関する特異性」について、制作者の視点から分析したもので、特に「絵」の持つ機能性や役割について考察されたものである。その中で「絵本」というメディアが持つ独自性を分析する中で、「読む」という行為を通して「考える」ための「装置」であることに着目した点について高く評価する。その主な分析内容は以下の 3 点

である。
1.絵本における記憶性
自身が一児の母親であり、また教育者という立場から、絵本の読み聞かせを通して児童に物語へ没入させ、疑似体験させるための絵本という「記憶性」への考察があった。また絵本という「物質性」も児童の身体経験、つまり記憶性にも繋がることを実際の読み聞かせを例に挙げ分析している。
2.ページ構成と物語の関係性
絵本に限らず書物は流れの中で成立することを、題材となった絵本作品を例に挙げて、画面構成やページの前後の関係性について分析している。
3.身体性
絵本が映像作品と根本的に異なるのは 1 でも触れたように、その「物質性」にある。そこには絵本の判型（サイズ）や画面構図などが読み手に与える影響、つまり絵本との身体的距離感についても十分に言及されている。
　これらの論証は今後更に深められるとともに、他の分野においても発展できる可能性を有しており、本論文が博士学位論文として十分認められると判断する。

（副査　山越康裕）
　本論文は、筆者が実践した制作活動をふまえた民話絵本分析を通じてことばに対する絵の特異性を明らかにすることを試み、民話絵本における絵の効果について論じたものである。言語情報だけでは伝えきれない絵の効果を丁寧に分析し、言語化することに成功していると評価する。精密に描写することがよいのではなく、発達過程に応じた抽象化や、想像をふくらませる余地を残すことの重要性を指摘したことは、近年ひろく実践されつつある少数言語文化の保持・再活性化を目的とする絵本制作において配慮すべきポイントとして可視化された点で有益である。
　なお、民話に絵を付けることに対する否定的な側面について触れられなかった点は、ことばと絵との対比の客観的分析という点でやや不十分な印象を受ける。ただしこの点については著者も自覚しており、今後の課題として認識していることが発表会にて確認された。
　以上を総合的に勘案し、本論文が博士論文として十分に評価に値すると判断する。